

図書館は脇役的な存在。 生徒に寄り添い、生徒が価値を感じる 図書館づくりに力を尽くす



新しい学び<主体的・対話的で深い学び>の実践の場として、学校図書館が注目されています。「読書」「学習」「情報」におけるセンター的な役割を担うことが求められていますが、その取り組みはさまざま、図書館を通じて学校の骨格が見えてくるといっても過言ではありません。そこで「LOVELY LIBRARY」では学校図書館を訪問し、そのあり方をレポートします。今回は、城北中学校・高等学校で図書館指導部長を務める司書教諭の村上善美先生にお話を伺いました。



図書館は1階の昇降口近くにあり、誰もが気軽に立ち寄れます。中3の卒業論文がカリキュラムに加わり、調べたことを目的に訪れる生徒が増えています。



蔵書数は6万冊。ソファもある1階では、思い思いの場所で読書する生徒の姿が見られます。くつろいでもらうためのクッションも増やしています。



館内に大型モニターを設置して本の紹介動画などを流しています。「生徒にはインパクトがあって、印象に残りやすいようです。月1回程度、内容を更新しています」(村上先生)

学校図書館は 生徒中心の場所であるべき

村上先生は同校の卒業生です。大学を卒業後、2年ほど公共図書館に勤務して、母校に戻って来ました。

村上先生 前任の先生が定年退職でお辞めになる時に、「採用試験を受けてみないか」とお誘いをいただいたことがきっかけです。

司書・司書教諭の資格を取り、図書館で働きたいと思ったのは、高1の文理選択に向けて自分の将来を考えた時でした。城北中学校に入学すると勉強と部活動(卓球部)に時間を取られて、読書から離れていました。図書委員もやっていませんし、図書館も勉強を目的にたまに利用する程度でしたが、父は出版社で、母は図書館で働いていたので、幼い頃から本が身近で、公共図書館もよく利用していました。親の影響もあります。図書館の雰囲気が好きで、そこでなら自分の性格に合う働き方ができると思い、今に至っています。

自由と規律のバランスがとれた校風のもと、「人間形成」と「大学進学」を目指す同校で過ごした村上先生が、前任の先生から受け継いで大事にしていることは「学校図書館は生徒中心の場所であるべき」という考えです。

村上先生 それは何をいっても譲ってはいけないと思っています。学校図書館はどちらかというと生涯的な学習をする場です。進学校として、大学受験に向けての勉強を6年間積み重ねていくことを大事にしている本校では、脇役的な存在です。ですから生徒には(図書館は)自分のペースで過ごすことができる「教室以外の1つの居場所」と思ってもらえるように、生徒のための空間づくりを念頭に置いて活動しています。

ありがたいことに、本校の図書館は1階の昇降口近くに、誰もがアクセスしやすい場所にあります。図書館に足を運んでもらうための施策をあまりしなくても、一定数の利用者がいます。予算も十分にいただいているので、どのジャンルにおいても必要な本がある、更新されている、という状態にしておくのはもちろんのこと、生徒がリクエストしてくれた本は基本的にすべて購入しています。ここに来れば読みたい本が読める。何かしらおもしろそうな本と出会える。そう思ってくれば、再び足を向けてくれると思いますし、生徒による口コミで利用者が広がると思うからです。

クラスで選出される図書委員(1クラス2名/計90~100名)の活動を最小限に留めて、活動に意欲を示す生徒を図書委員だけでなく外部からも募り、有志の委員(今年度は15名)として自由に活動させる仕組みも、生徒中心の図書館を運営する上で大きな力になっています。

村上先生 図書委員はいずれかの学期で週1回カウンター当番をします。

有志の委員は書店での選書会、文化祭の古本市の企画・運営、他校の図書委員会との交流会(芝、鷗友学園と、会場を

持ち回りで年2回実施)などに参加します。文化祭の古本市は、事前に呼びかけを行うと生徒だけでなくOBの方も協力してくださり、3000冊くらいの本が集まります。それを当日、展示して無料で配布しています。他校の図書委員会との交流会は、私が赴任する前から行われていました。生徒たちは良い刺激をもらっています。準備が必要になることが多いので、日程を調整して集まるとは、中高生の隔てなく、和気あいあいと意見を出し合って活動しています。

同校の図書館はメゾネットタイプで、図書館の中に階段があります。踊り場や周辺の壁など、至るところに有志の図書委員による心のこもった展示物があり、思わず足が止まります。2階には個別の自習スペースが設けられており、年によっては高3生だけ閉館時間を2時間ほど延長して、学習を支援することもあります。

村上先生 中高6年間で城北で過ごすことができよかった、と思って卒業してほしいので、図書館としてできることは最大限に協力するという姿勢で取り組んでいます。

生徒が自ら足を運ぶ 図書館を目指して試行錯誤

村上先生は同校に赴任する時に、毎年1つは生徒のためになる取り組みをしようと考えていました。最初に動いたのは国立国会図書館のレファレンス協同データベースへの参加でした。

村上先生 調べたことをこうした場所にアップしておけば、本校だけでなく、他校さんのお役に立つこともあるかもしれないと思ったからです。これを機に、自分で調べきれない時に、図書館に来て司書にアドバイスを求めることが一つの手である、ということを知ってもらえたらいいなという思いもありました。実際のところは、生徒から本や調べ物に関する質問はなく、データベースを使う機会がありませんでした。

中3が1年間かけて書き上げる卒業論文に取り組むようになったのは、ここ数年のことです。調べ物をするために本を借りに来る生徒や、先生方から質問を受けたり協力を求められたりすることが徐々に増えてきましたが、当時はほとんどありませんでした。

そこで2年目は、身近なコミュニケーションツールとして質問箱を作り、図書館内に設置しました。

村上先生 質問に対する回答は、図書館の前に貼り出します。中にはふざけた質問もありますが、適当にいなしつつ回答することによって、それを見るために、あるいは新たな質問を入れるために、図書館に来る生徒が増えたように思います。今はコロナで中断していますが、質問箱の設置は図書館に足を運びやすい雰囲気づくりに役に立ったのではないかと考えています。

村上先生はこうした新たな試みを始めても、あえて宣伝しません。図書館に来たら、いつからかそういうものが置いてあって、おもしろそうだなと思った生徒が利用してくれればいい、という考え方だからです。

村上先生 誰かに言われて無理矢理やらされる時と、自発的にやる時とではモチベーションも得るものも違います。例えば、周囲の数人から「これ、おもしろいよ」と言われたら、自発的に読んでみようとかやってみようと思うじゃないですか。ですから、図書館から「こんなことを始めたから来てね」と発信するよりも、図書館を利用した生徒の口コミで広がって、おもしろそうだなと思って自発的に利用してもらった方がよいと思い、押し売りのような宣伝はしないようにしています。

本の宣伝に関しては、館内の大型モニターで本の紹介動画を流す・長期休み前に「図書館だより」を発行するくらいです。あとは、本を読みたくなった時に、どこにどんな本があるのかを知っていればすぐに行動できるので、中1向けのオリエンテーションでは分類の説明をしています。

本校とこの図書館の特性上、生徒にとって図書館は「これおもしろいよ」とこっそり言うてくる1人であるくらいが丁度良いと思っています。

居心地のいい空間づくりとしては、開放感を得られるようにレイアウトを変えたり、カーペットを張り替えてもらったり…と、少しずつ手を加えています。

村上先生 今年は本の配架を変えました。2階よりも1階のほうが広く、ゆったりとしたスペースなので、小説を読むなら1階のほうが適しているだろうと思い、2階にあった小説を下ろしました。そのスペースを確保するために、別のジャンルの本を1階から2階に移動しなければならず、何万冊もの本を動かす大変な作業になりましたが、やってよかったと思っています。

小説が人気という同校では、どのような作品がよく読まれているのでしょうか。

村上先生 はやみねかおる著の「都会(まち)のトム&ソーヤ」シリーズがよく読まれています。最近では「異世界転生」といわれるジャンルも人気です。相棒のノベライズ本も手に取る



城北学園の創立者、深井鑑一郎先生は漢文学者であり、寄贈された和漢書は「深井文庫」と名付けられた書棚に大事に保管されています。



図書館に足を運べば、自ずと読書が広がる仕掛けにも余念がありません。城北生にオススメの本が一目でわかるコーナーも充実しています。

生徒が多く、常に誰かが読んでいます。

また、授業中に先生が紹介した本は、必ず誰かが借りに来ます。「この本、ありますか」と2人くらいが連続で聞いてきた時は先生が紹介していることが多いので、そのつど「先生の影響力はすごいな」と感じています。

ちなみに小説以外のジャンルでは、乗り物系、生き物系(特に昆虫)の本や、お金に関する本が人気です。ここ数年ではプログラミング系にも関心が高まっていて、そういう「男子校らしさ」は校内見学で図書館を訪れる受験生の保護者の心をつかんでいます。

素直な生徒が多く、学校の雰囲気は大らかで寛容

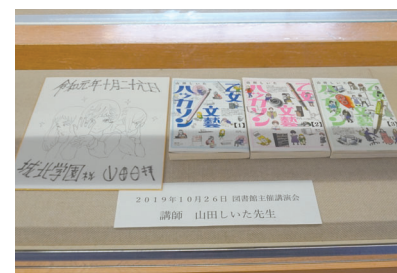
村上先生 全体的な傾向として、城北生は素直なんですよ。時々OBが遊びに来てくれて話をすると、「城北はオタク系の生徒が教室の中心になれる。それはかなりいい環境だったよね」という話になるのですが、今の生徒たちもお互いの趣味嗜好を認め合うことができている。学校の雰囲気としては大らかで寛容なのかなと思います。

図書館を訪れる生徒たちも、「先生、この本を知っていますか」「この本はありますか」と、気さくに声をかけてきます。

村上先生 ありがたいです。もちろん中には自分からは声をかけづらいという生徒もいますが、私が在学していた頃と比べると、今の生徒のほうが教員と話すことへの抵抗感がないように感じます。先生と生徒という立場をわかっていながらも、場合によっては非常に距離感の近い感覚で話してきます。それでも構わないよ、という雰囲気になっているのは、そうした生徒の変化を先生方が受け入れているからだだと思います。

村上先生は生徒との会話が深まるように、中高生が興味を持つ本に目を通そうと、時間を作っては書店に足を運んでいます。

村上先生 生徒が自分の好きな本について話をしてくれた時に、それがどんな本なのかをある程度知っていると会話が弾みますよね。トレンドを把握することも(司書教諭の)仕事



ショーケースには過去に講演会にお招きした先生の著書が紹介されています。こうした展示により活動の歴史に触れて、有志委員に参加する生徒もいます。

小中学生にオススメの良書

1. にげてさがして (ヨシタケシンスケ 著/赤ちゃんとママ社)

自分を大切にすることは、誰にとってもとても大切なことだと思います。本書は、タイトルの通り、「自分を守るためには逃げてもいいんだよ、大切なものは探しに行けばいいんだよ」という、自分を大切にする方法を教えてください。絵本で小中学生には幼いと思うかもしれませんが、大人の心にも響く作品です。

2. 二十四の瞳 (壺井栄 著/岩波文庫他)

瀬戸内の一寒村に赴任した大石先生と、個性豊かな12人の教え子たちによる物語です。絆を深めていった新米教師と子どもたちは、戦争の渦に巻き込まれ、彼らの運命は大きく変えられてしまいます。第2次世界大戦をはさんだ約20年間の庶民生活を描き、戦争否定と人間の平等を訴えた名作です。

3. きみを嫌いな奴はクズだよ (木下龍也 著/書肆侃侃房)

あなたは短歌と聞いてどのようなイメージを持っているでしょうか。もしかしたら、あなたの持つ短歌のイメージをガラッと変えてくれるかもしれません。「やめておくれおれはドラえもんになんかなりたくなぼくドラえもんです」(本文より引用)

の一つなので、書店にはよく行きます。

コロナを機に生徒が自分のデバイスを持つようになり、授業での活用が進んでいます。そこで、本のリクエストをGoogleフォームで送信できるようにすると、リクエストの数が増えました。良さそうな本を見つけても、次の日になると忘れてることよくありますよね。デバイスだと、見つけた時に送信できるので使い勝手がいいのです。最近はその情報から生徒のニーズをつかんで、人気が出そうな本を先に購入しておくということもしています。

今後の課題としては、好きな本の会話にとどまらず、中3が1年間かけて取り組む卒業論文に有用なかかわりをもつことです。

村上先生 図書館としてどこまで踏み込むか、というところは検討する必要がありますが、図書を活用して調べ、ということに関しては司書を頼りにしてほしいという思いがあるので、気軽に質問してもらえる関係性を築いていきたいですね。

一方で、電子図書館にも関心があります。私は(一財)東京私立中学高等学校協会の委員会に所属していて、研修会の企画・運営に携わっています。そこで電子図書館の研修会を企画し、実際に運営されている企業の方々にお話をいただきました。他校さんからもお話を伺う中で、そろそろ城北でも検討してもいいのではないかと考えています。

最後に、読書のおもしろさや読書体験を広げるためのアドバイスをいただきました。

村上先生 読書は一文を読む。一段落を読む。一章を読む。一冊を読む、というように、一つひとつを積み重ねていく作業だと思います。その過程で知識や教養、あるいは集中力や落ち着きのようなものを得られます。それが読書の効用というか、良いところだと思います。

私も中学生あたりまではバッグの中に常に本を1冊入れていて、時間があれば読んでいました。当時はファンタジーやミステリーを読むことが多かったように思います。その後、高校、大学時代に読書から離れた理由は、自分の時間の使い

方の中で、読書の優先順位が下がってしまったからだと思います。生徒に聞けば「読書よりも、YouTubeを見たりゲームをしたりするほうが楽しい」と言う子のほうが圧倒的に多いと思います。私自身もそう思います。社会人になって、自分のための読書を再開しました。よく読むジャンルはSFです。昔と読書の傾向が変わったのは、周りにSFが好きながいて、おもしろい本をおすすめしてもらえたからです。

そうした自身の経験を踏まえて考えてみると、読書が続かどうかは、その人にとっておもしろい本と出会えるかどうかだと思います。今まであまり本を読んでいない人、読書を苦手だと思っている人は、身近にいる自分と興味が近い人に「おもしろさを感じた本」を教えてもらい、読んでみるといいと思います。最初の1冊、2冊でおもしろさを感じることができれば、読書に興味を持ち始めて、そこからいろいろな本に興味広がっていくと思います。好きな著者が見つければ、その人の本を中心に読んでみるという方法もあります。聞く人が見当たらない、という時に、図書館にいる人(司書)を思い浮かべてもらえたら嬉しいですよ。

ご自身の原体験から「無理強いをしない」「押し付けない」をキーワードに、生徒とコミュニケーションを取ることから始めて、希望を取り入れ、決して急ぐことなく生徒が価値を感じる図書館づくりに取り組む村上先生は、終始穏やかで、どこか楽しげでした。

その姿は、個人々人を尊重する城北で自分自身を見つめて、自分らしい道を切り拓くために努力することの意味を教えてください。村上先生が図書館で後輩たちと紡ぐ時間は、これからますます価値のあるものになっていくに違いありません。

ナビゲーター 金子裕美(プランニュー合同会社/企画・制作)

私立中高一貫校で体育の授業や部活指導を受け持つ傍ら、スポーツ専門誌で取材活動を始めます。その後、出版物やWeb、映像などの企画・制作を生業とし、主に教育・スポーツ・キャリア分野で活動。コロナを機に、長年の取材活動や子育てを通して習得した知見と経験を生かして、コンテンツを創出する活動にも力を入れており、オンラインの自立場「エディタースジュニア」や、特定非営利活動法人VRAVO N+様との協業で、オンライン部活支援プログラム「#考動パレー」を展開している。→エディタースジュニア(保護者のおしゃべり会を定期的に開催しています)

